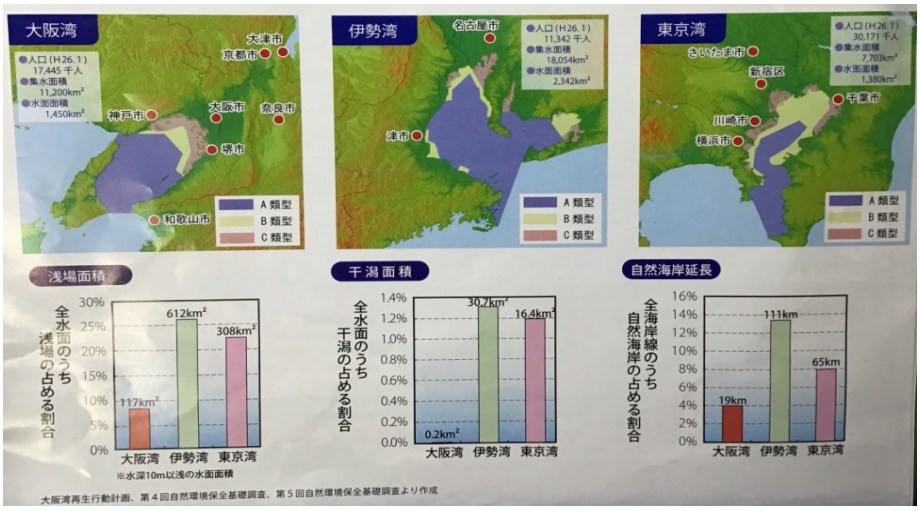
大阪湾・伊勢湾・東京湾

「大阪湾再生行動計画 2019」のなかで、大阪湾を東京湾・伊勢湾と比較して、次のように説明している。大阪湾、東京湾、伊勢湾の三大湾はいずれも閉鎖性海域であり、自然海浜等の消失、海水の汚濁や生物多様性の低下などの課題を抱えています。なかでも、大阪湾は浅場面積、干潟面積、自然海岸延長の割合が、伊勢湾、東京湾に比べて少ないのが現状です。



写真を見ていて、伊勢湾研究会編『伊勢・三河湾 再生のシナリオ―海と人間の共生を求めて』八千代出版、1995 年に書いた論文を思い起こした。冒頭を紹介したい。

いまから 7 年ほど前に、「伊勢湾の未来を、美しい夕日を、子らへ伝えよう」というスローガンをかかげた市民の集いが、名古屋で行われたことがある。作家の椎名誠さんの「海について考えていること」という記念講演のあと、「伊勢湾の開発構想をめぐって―東京・大阪湾の経験を学ぶ」というフォーラムがあった。そこで伊勢湾の開発構想について報告する機会をえたが、最後に私たちはとかく経済面を優先して、海から陸をみる視点を欠落しがちでないかと述べた。これをうけて 365 日ずっと海から陸を眺めている千葉県船橋漁協の大野一敏さんが、東京湾をめぐる巨大開発による青潮の被害などの生々しい事例を報告した。ついで弁護士の横井貞夫さんから、大阪湾の開発経過と環境の変化、とくに新空港建設に伴う埋立の問題点が示された。

この市民の集いの頃は、ちょうどバブルが膨張しはじめ、日本列島は開発ラッシュにわいていた。海ではウォーターフロント開発、山ではリゾート開発、そして都心部では都市再開発などである。東京湾や大阪湾も例外ではなく、猛烈なスピードで開発が進行して海の様相を一変させてきた。それだけ環境への負荷も大きくなり、あらためて海をめぐる「開発と環境」のあり方に問題を投げかけた。ここ伊勢湾はどうか。先輩たちの経験をしっかり学んで、海の環境保全に向け前進がみられたか。現段階では少なくともそれとは逆の道を歩んでいるのでないか。先輩たちの真似をして、「世界都市化」戦略のもとに巨大開発により傾斜してきていないか。

（2019 年 5 月 19 日）